

立命館大学大学院文学研究科

人文学専攻修士論文要旨

モノの伝記に関する人間学的考察

——モノとの関わりと唯一性——

教育人間学専修 平山達也

私たちの日常生活はモノの存在なしには成立しえない。そのようなモノを、「人間の手の届く範囲にある人工物や自然物」と定義した上で、モノと人間の関係そのものについて考察を行った。

第一章ではまず、モノと人間の関係として取り上げられやすい二つの特殊性について触れる。一つはモノの側に由来する特殊性であり、そのモノの希少性や自然物などに見られる再現不可能性が特殊性となっているものである。もう一つの特殊性としては、人間の側に由来するもので、人間関係の中で特殊な意味づけがなされるモノである結婚指輪や遺品などから、自身にとって個人的に何かの記念として特殊な意味づけがなされているようなモノまで含むような特殊性である。これらの二つの特殊性とは異なる「モノと人間の関係」そのものによって語られるような、モノと私が出会ったときから生じる性質を「唯一性」として、本稿の主たる考察の対象としている。

第二章ではコピトフの論文「モノの文化的伝記」を参考にしながら、モノの唯一性とその対となる性質である商品性について考えていく。コピトフは文化

人類学の立場から、モノの理想となる伝記が文化ごとに異なることに着目しながら、それぞれの文化のモノと人のありようについて分析を行っている。また、一つのモノに混在する唯一性と商品性について、商品の階層構造や、終端商品などのコピトフの例を参考としながら考察を進めた。

第三章では、考察の対象をコピトフの言う「モノの『文化的』伝記」から、個人的なモノの伝記とそこに見出される唯一性のありようへと移していく。それは「このモノ」と「この私」による「このモノと私」の関係についての考察である。その唯一性もたらず一体化や調和の感覚を表す言葉として、「馴染む」という表現を用いた。そのような唯一性の具体的な例として、ヤカンや靴、摺り木についての文章を取り上げ、「このモノと私」が馴染んでいく様子について分析を行った。

これらのことから、モノと人間の関係について、商品価値という判断と相対するものとして唯一性というものが存在し、その性質は「このモノと私」の関わりによって支えられていることがわかる。そして、「このモノと私」という範囲に留まりがちなモノの伝記は、その唯一性を直接経験していない人間にも、「この私」の残した言葉や、「このモノ」の姿かたちを通して理解されうるものであることがわかった。

現代短歌に関する人間学的考察

——「私」「場」の変容をめぐって——

教育人間学専修 宮崎 哲生

本論文は現代短歌をめぐる諸問題について人間学的な視点から考察したものである。特に一九八〇年代半ば以降に登場する「ライト・ヴァース」「ニューウエーブ」「かたん短歌」「ケータイ短歌」と呼称される短歌に注目し、それらの短歌が拠り所とする人間観や短歌観などを顕在化させることが研究の趣旨である。

二部構成で綴られる本論文の一貫した主張は次の二点である。一点目が「サブカルチャーや消費文化や情報化社会などを意味する広義の『現代文化』」に、現代短歌は取り込まれた（支配された）のである」（※現代短歌が「現代文化」を取り入れたのではない）という主張であり、二点目が「一九八〇年代半ば以降に、短歌における文体の表面的特徴だけでなく、そのように詠い上げる作者の人間観や短歌観に大きな変容があったのだ」という主張である。前者は特に第一部（第一章）で、後者は特に第二部（第二章）で具体的な論拠に基づいて示されていく。

伝統的な歌壇から距離を置いてなお詠わずにいられない若者および彼らの作品には、文芸的価値の追求とは異なる重要な人間学的諸相が潜在している。第一部（第二章）で取り上げた「かたん短歌」に固有の特徴とは、徹底して読者を意識すること・散文短歌への志向性・仮想敵への反発意識の三点である。これらの特徴からは、歌のなかに「私」を出さずに他者への共感や同意を希求する若者の心性を見て取れた。また、第一部（第三章）で扱った「ケータイ短歌」の本質とは、ケータイという情報端末機器に由来する（私と誰かとのつながり）意識である。しかし若者がつながりを希求するのは必ずしも積極的な理由ばかりではない。本稿ではこれを「やさしさ」のねじれから説明した。

文学研究では扱われにくい若い世代の歌はしかし、現代短歌の課題として掲げられる「私性」や「場」の問題を考えるうえで重要な視点を投げ掛ける。第二部（第二章）では現実の「私」、仮構の（私）、世界のどこにでもいる「わたし」、を（仮面）・「顔」という発想から考察し、「私」の変容を指摘した。また時代ごとに詠われる「わたし」の分析は、やはり八〇年代半ばに人間観の転回が起きたことを裏付けた。第二部（第三章）で論究されるように、情報化社会は短歌における「場」の語義を拡張し、（複数の顔）を持つ短歌を登場させる。また（場）が多様化した現代では、短歌作品における署名が磁場の役割を果たした。こうした発見は、現代短歌を広義の人間学的な視点から論究した本論文ならではの成果である。

万葉歌と由縁伝承

日本文学専修 田頭正浩

本論は、「三方沙弥娶園臣生羽之女未經幾時臥病作歌三首」という題詞・由縁を持つ『万葉集』巻二の一二三番歌から一二五番歌である三方沙弥と園臣生羽之女との恋歌を中心に、『万葉集』巻二の相聞歌とその由縁伝承について、その構造や詠者・編纂者の意図について論じたものであるとともに、それらの由縁伝承が何を受容し、何に影響を受けた結果であったのかについて論じたものである。

第一章は、巻二相聞歌の由縁伝承を巻十六有由縁歌と比較研究し、巻二相聞歌の編纂者の意図や「書くこと」によって生まれた物語的虚構性について明らかにしようとした論である。第一章においては、巻二相聞歌は編纂者の意図によって「書かれた」物語であり、歌にまつわる由縁伝承が物語的虚構性を意図して「書かれる」ことによって、一つの物語として語られたのではないかと論じた。『万葉集』巻二の編纂者も巻十六編纂者と同様に「物語的関心」「物語創作の意欲」があったことを考察した。

第二章は、三方沙弥万葉歌について研究し、その物語性や受容について考え、唐の文学や文化を学んだ仏教者達から新しい文学が生まれたことを明らかにしようとした論である。第二章においては、久米禅師・三方沙弥といった唐の文学や文化を学んだ仏教者達から、創作した出来事を物語として「書き」語るという創作作品、一種の「小説」を書いてみようとする試みが生まれたのではないかと論じた。また三方沙弥万葉歌が、『万葉集』巻二編纂時と『古今和歌六帖』編纂時とは人々に異なった受容がされていたことも考察した。

第三章は、巻二相聞歌と『遊仙窟』との影響関係について考え、物語的虚構

性を書く源となったものについて明らかにしようとした論である。第三章においては、唐代伝奇小説であり、中国恋愛小説の原型としてとらえられている『遊仙窟』が、巻二相聞歌の作歌に影響を与えた可能性と、巻二編纂時における『遊仙窟』からの影響について論じた。歌の由縁伝承を「書くこと」語ることは、中国文学、特に巻二相聞歌も巻十六有由縁歌も「男女の恋愛」を主題とする歌に由縁がつけられ、その恋愛には「悲劇性」が伴うこと、更に「歌の応酬」によって物語が展開することから考えて『遊仙窟』の与えた影響の大きさについて論じた。

『万葉集』巻二相聞歌の由縁伝承は、物語的関心を持って「書かれた」物語であると私は考える。その物語的関心は、中国文学特に「男女の恋愛」を主題とする『遊仙窟』によるものが大きく、中国文学を学ぶ仏教者達からその関心が深まっていったのではないだろうか。

『更級日記』の研究

— 姉の見た夢をめぐる —

日本文学専修 久我有生

『更級日記』には、一一の夢の記事がある。一一の夢のうち、九例の夢が作者の見た夢、残りの二例が作者以外の者の見た夢である。作者自身の見た夢は今までもよく論じられてきている。だが、作者の姉が見た夢については、これまで、その記事の内容の関係もあり、あまり大きくは扱われてきていない。

その夢とは、實在の人物・侍従大納言の姫君の死後、作者の姉の夢に猫の姿となつて現れる夢である。『更級日記』の中で、夢の多くが作者への夢告であるのに対して、姉の見た夢は、仏教の輪廻転生や、説話的な凶形が投影しているなどとみられてきた。本稿では、このように、姉の見た夢を解釈することはひとまず置いて、「猫への転生」の段全体を俯瞰してみようと思う。実は、この「猫への転生」の段は、姉が初めて本格的に登場する段である。そのことを踏まえて、姉にまつわる記事を総体として眺めてみると、この段の役割がみえてくる。この段の注目すべき点は、まさにこの付与された役割に気付くことにある。よつて、このことについて論じていきたい。

「猫への転生」の段の役割について論じるにあたり、本稿では、姉妹の関係の描かれ方を中心にみていきたい。そして、「猫への転生」の段と、その後続く、姉にまつわる記事全体を見通しつつ、この段の位置づけを提示していきたい。さらに、『更級日記』の中で、姉妹がどのような関わりをもつ存在として描かれているのか、また、姉を描くことで何を表現したかったのか、姉にまつわる記事を俯瞰することで、これらの疑問を明らかにしていきたいと考えている。

埴仏の基礎的研究

二八

日本史学専修 米田浩之

先学諸氏の仏教考古学に関する提言を念頭に置いて埴仏研究史を振り返ると、一部の論考を除きそのことごとくが信仰の問題を扱うことなしに語られてきたことに気付く。仏像を表現する点で、瓦などに比べ教義面が大きく反映されるこの遺物について、その背景にある人間の信仰を探るといふ多くの先行研究で欠落していた視点をもつて、新たに検討を進める必要がある。

本稿は、考古学の基本的な方法としての型式分類と、信仰が反映される可能性の高い画像属性の分類とを組み合わせた体系的な分類に出发し、その分類に基づいた分布論と機能論とによって、埴仏の伝播とその信仰の様相を探り、人間の心性を見つめようと試みたものである。

まず唐・新羅・古代日本のそれぞれの埴仏を分類した結果、唐・古代日本間に、主流を占める画像属性の相違を確認した。加えて、唐・古代日本間に画像酷似例が存在することが明らかとなった。

次に、特に古代日本の埴仏を取り上げてその分布様態を分析すると、唐から選択的にもたらされた弥勒仏画像の埴仏が、限定的に畿内から畿外へと流布した実態が浮かび上がった。弥勒仏の意味を考慮すると、ここに理想的王権を建設するという国家の意思を読み取ることができる。

一方で埴仏の機能を探るため、画像属性を念頭に置きながら、埴仏に付帯する考古学的情報によって用途を推定したところ、壁面装飾と礼拝像との先行研究で指摘されてきた用法をより具体化できた。さらに、埴仏壁の源流と考えられる中国北朝石窟の千仏思想を踏まえると、実際の使用場面において、流布に際して重視された弥勒仏という側面にとらわれることなく仏名を持たない仏た

ちとして、博伝に、災難を避け幸運を望んだ人々の祈りが込められていたことが判明した。

古代日本において国家と人間との迫間に位置した博伝だが、その本質は地域をまたいで、未来の幸運のために製作し、使用に供するところにある。言葉を置き換えると博伝とは、人間に根源的に潜む「救いようのない不安」を表象した遺物なのであった。